

討論

【竹内整二】 池澤先生と崔一凡先生のご発表をうかがいました。池澤先生は中国思想、特に現代の生命倫理思想が儒教をどのように解釈しているかという問題について触れられました。崔一凡先生は、現代の韓国人の死生観の問題に関心を寄せながら、栗谷李珥の死生観を分析されました。いずれも、儒教倫理を現代にどう理解し考えるかというお話だったと思います。

お二人のご発表に関して、活発な議論をしていただきたいと思います。



エリック・シッケタンツ氏

【エリック・シッケタンツ（東京大学COE研究員）】 東京大学死生学研究室特任研究員のエリックと申します。中国の近代仏教の形成を専門に研究しております。興味深いご発表、ありがとうございました。

崔先生に二点お聞きしたいことがあります。

ご発表原稿の始めの方では、現代韓国社会における死生をめぐる問題を取りあげていらっしやいますね。今の口頭のご発表でも、自殺した子供の事例に触れていらっしやいましたが、今回のご発表で紹介してくださった儒教的思想を、高齢者の貧困の問題や自

殺の問題などにいかに活かしていくことができるか、もう少し具体的にご説明いただければありがたいです。

二点目は、近年の韓国では自殺者が急増しているというのがこの後の鄭先生のご発表でも取りあげられています、その背景について少しご説明いただければと思います。

【崔一凡】 エリックさんのご質問は二つありましたが、最終的には一つにまとめてお答えできると思います。

なぜこんなに自殺者の数が増えてきたかを考えてみますと、その背景として、近代文明によって、人間性や人間の生命を尊重する価値観といったものが失われたことがあげられると思います。具体的に申しあげますと、現在の韓国社会では、あらたな階級社会とも言えるべきものが形成されつつあります。今の韓国は、幼稚園の時代から競争に勝たなければ生きられないという時代に突入しているのです。一等でなければ劣等生になってしまふ。要するに、社会的地位とそれに伴う経済的富が得られなければそれで終わりだという考え方です。韓国社会がそういった価値観に支配され、それによって生命を軽視してしまうという風潮が高まってきているわけです。

そういった問題の具体的な解決策を儒教的な観点から考えると、崩壊してしまった家族共同体を回復していくということになると思います。現在の韓国社会では、親が二人とも働かなければ経済的にかなり困窮するというのが現状です。それによって子供たちが放置されてしまうことになっているのですが、放置された子供たちを保護していくための対策を国家がとっていません。かつて韓国の家族は大家族でありまして、おじいさんがいておばあさんがいてといった家族共同体の中で、誰もが自然に死と生について学ぶことができていたのです。しかしそういった家族共同体が崩壊してしまった現状では、子供たちが祖父母と接する機会がなく、年を取っていくこと、また死にゆくことの意味がよくわからない。

国家がこういった大家族を回復していくというのは非常に難しいことではありますが、それでも、こういった問題があることを国家が強く認識し、その認識の上で現状を社会問題として取りあげ、それを回復に導く制度を考えていかなければならないと思います。かつては家族単位で行われてきたさまざまなことを、現代社会においては、国家もしくは社会が再建していかなければならない。そのことが、つまりは現代社会における儒教の現代的な適用、現代的な意義ではなかるうかと思います。

【竹内】

自殺問題は現代において、韓国と日本の大きな共通の問題だと思っています。

【呉進鐸（翰林大学校教授）】

翰林大学の呉進鐸オジンタクでございます。翰林大学では二〇〇四年に生死学研究所を作

りました。また、二〇〇七年から死を予防する教育、自殺予防教育を実施してきました。私の専門は仏教哲学、老荘哲学など、池澤先生と共通したところです。

池澤先生に質問がございます。ご発表題に「生命倫理」という言葉が入っているのですが、この「生命」という概念は非常に曖昧な言葉ではないかと感じています。儒教的伝統における「生命」をどのように考えていらっしゃるかを、まずお聞きたいと思います。

ご発表原稿にあります通り、儒教は膨大な蓄積によってできてきたもので、決して一人の人によって体系づけられたものでは



呉進鐸氏

ありません。孔子にしても、それ以前の思想から受け継がれたものを総合して集大成したのだろうと思います。実際、儒教のテキストでは死について実に多様な理解が示されており、たとえば孔子も、弟子の「死とは何か」という質問に、「生きていることの意味もわからないのに、死についてわかるものか」と答えています。また『礼記』にも、精気神といった観点が示されています。生死学あるいは死生学で、こういった生命、または死に関して定義をしていくためには、それが何なのか、言葉の定義がまず必要であろうと思います。しかし、儒教においてはそれが簡単ではないと思います。儒教における死生学とか死生学とかといった観点を立てることには懐疑的にならざるをえません。

二番目の質問は、儒教的立場における死とは何かをもう少し具体的に示していただきたいということです。

三番目は、韓国においても日本においても自殺が大きな問題となっているわけですが、死生学・死生学は結局自殺予防に実際のところどのように役立っているのだろうかということです。社会的関心やただの興味で終わるのではなくて、学問として、たとえばCOEプログラムを設立してやっているわけですから、社会的現実にとどのようにリンクしているのかをお聞きたいと思います。

【竹内】 質問がたくさんありましたし、最後の総合討論ではこの自殺の問題についてまとめて議論したいと思っておりますので、最初の二つについてお答えください。

【池澤優】 おそらく三つまとめて答えてしまう方がよいような気がします。

まず一番目の「生命」の問題なんですが、結論からいいますと、儒教における生命という形で問題を立てることに懐疑的だという呉先生のご意見は、その通りだと思います。私の論文タイトルで「儒教的生命倫理」と

したのは、この一群の研究者たちが最初に出した論文が「*Confucian Bioethics*」というタイトルで、それを漢字に直したからです。「儒教的生命倫理」と言ったときの「生命」は、「Bioethics」の「Bio-」に相当します。この言葉を使つたのは陶黎寶華という人で、これを生命倫理と訳したのは正しかったのかという問題は確かにあります。

二番目の「死」ということも一番目の問題と同様で、これは私が言うまでもなく、膨大でいろいろな考え方があるわけですね。だから崔先生があげられたような、人間の道徳性によつて死を理解する、あるいは記憶によつて理解するという方法もあるし、また気の集散によつて理解するなどさまざまな考え方がるので、これは私が簡単にお答えできるような問題ではないと思います。

三番目の問題はたしかにあとで議論した方がいいかもしれませんが、簡単に申しあげておきますと、私自身は現実的問題を中心に扱っているわけではないのですが、このCOEプロジェクトではそれをやっている方が実際にいらつしやいます。もしかすると総合討論の時に紹介されるかもしれません。

【竹内】 最後の現代韓国、現代日本の自殺については、最後の総合討論でまとめて議論をしたいと思います。それでは、第一セッションをこれで終わります。